無痛分娩セミナー
受講済

持続硬膜外麻酔による無痛分娩の説明

【はじめに】

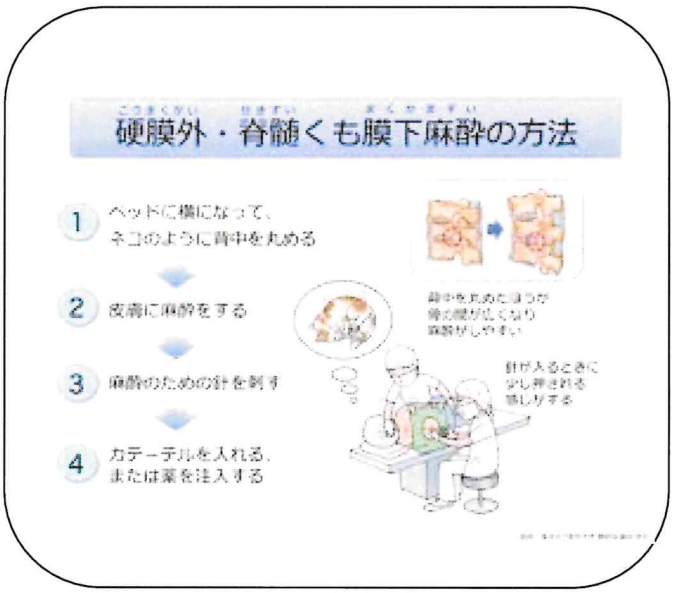
出産の際には必ず陣痛を乗り越えなくてはなりません。昔から自然分娩にあたっては、呼吸法などにより何とか陣痛を和らげることが試みられてきました。しかし、それらの方法による陣痛の緩和には限界があります。それでも日本では『そのつらい陣痛に耐えるのが当たり前』『陣痛は我慢しないと仕方がない』といった陣痛に対するある意味では諦めのようなものがあります。

そこで西川産婦人科では、日本ではまだどこの産院でも一般的に行われていない『無痛分娩』を選択できるようにいたしました。妊娠・出産の前から陣痛の苦痛に対し不安を抱かれていたかもしれませんが、無痛分娩によりお母さんは分娩に対する恐怖やストレスから解放されます。分娩に不安を抱かれているお母さんから分娩時の痛みを取り除くことで、よりよいお産を目指したいと考えております。

【硬膜外麻酔による無痛分娩とは】

現在、欧米先進諸国では多くの出産において陣痛を和らげるために医療の介入が行われております。その中で最も一般的な方法が『硬膜外麻酔による無痛分娩』です。

硬膜外麻酔とは背中に通っている神経（脊髄）のすぐそばに細いチューブ（硬膜外カテーテル）を入れておき、痛み止め（鎮痛剤：局所麻酔剤および少量の麻薬）をそこから注入して部分的に痛みを取り除く麻酔です。硬膜外麻酔は日本でも帝王切開の際に広く用いられている麻酔方法です（当院でも帝王切開を始め開腹手術の時に用いています）。硬膜外麻酔の麻酔薬は全身に行き渡る事もなく、お母さんの意識は保たれ赤ちゃんにはほぼ影響しません。



鎮痛剤の注入後、麻酔が効き始めるまでに個人差もありますが、20～30 分程度の時間差があります。無痛分娩の間は下半身に軽い麻酔がかかった状態になるので、基本的には麻酔が終わるまでベッド上で安静にしていただき、少量の水分摂取は可能ですがそれ以外の飲食は控えていただきます。点滴により水分・栄養の補給はいたしますので心配はいりません。

周期的は子宮収縮により軽い陣痛の感覚（張っている感じ）はありますが、痛みはほとんど感じません。麻酔により陣痛が弱くなってしまった場合には、出産が長引くのを回避する目的で陣痛促進剤を使用する場合があります。

そして子宮の出口（子宮口）がしっかり開いたら、陣痛の感覚とともに『いきみ（怒責）』を行っていただきます。麻酔がよく効いている場合は『いきみ』が赤ちゃんにうまく伝えられないことも多く、その際にはお腹を押してあげたり（腹上からの圧出法）、赤ちゃんを引っ張ってあげたり（吸引分娩）して出産の手助けをいたします。

出産の際にできた傷の処置が終わるまで麻酔が効いていますので、縫合処置は痛くありません。出産後処置が終わった後に、背中のチューブを抜きます。出産直後から授乳は通常通りに行うこともでき、数時間すると歩行や飲食も可能になります。

【硬膜外麻酔による無痛分娩の際に起こりえる問題点】

硬膜外麻酔による一般的な副作用や合併症

①血圧低下　→　ほとんどの場合は点滴を増量することで十分に対処できます。

②局所麻酔薬の血管内迷入による局所麻酔薬中毒症状

③硬膜外カテーテルが硬膜を貫くことによる広範囲にわたる麻酔効果（呼吸困難など）や麻酔終了後の頭痛の持続

④感染、出血、神経障害（尿意の消失など）

⑤不十分な麻酔効果

薬剤による副作用（アレルギーなど）が起こる場合があります。

これらの問題点は早期発見によりある程度回避可能です。もしこれらの問題点が生じた場合は、母子の安全を最優先に考慮して迅速に対応させていただきます。

妊娠・出産中は想定していない出来事が起きる場合があります。上記以外の重大な状況が起こった場合は説明させていただきます。

【無痛分娩の費用】分娩費用とは別に必要です。(消費税別途必要)

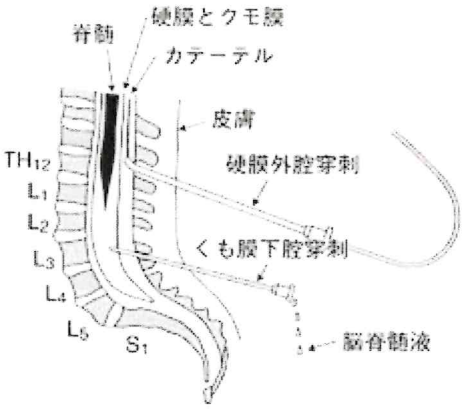
手技料金　＋　麻酔薬料金　＝無痛分娩費用 80.000（円）

（無痛分娩の方は無痛室使用の為部屋代とは別に 3000 円/日かかります。）

【注意事項】

・陣痛が始まれば、絶飲、絶食で来院してください。(胃の内容物が消化するのに時間がかかる為)

・誘発入院の方は、朝食抜きでお願いします！



説明医師　西川 義規　西野 理一郎　西川 誠一

以上の説明を読み、内容について十分理解し、持続硬膜外麻酔による無痛分娩を受けることに同意します。

令和　　年　　月　　日

患者様氏名（自署）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　電　話＿＿＿＿（　　）＿＿＿＿＿＿

住　　所　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿